

唯物弁証法の発展

井上 周 八

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 唯物弁証法の系譜 | (B) 対立物の闘争と統一の法則 |
| 2 新しい時代と新しい哲学 | (C) 否定の否定の法則 |
| 3 弁証法の発展 | (D) 三大法則の関連 |
| 4 弁証法の三大法則 | 5 おわりに |
| (A) 量質の法則 | |

1. 唯物弁証法の系譜

弁証法 (Dialectic) という言葉は、周知のようにギリシャ語のダイアレクティケーから来ており、元来は会話の技術、弁論の方法を意味していたという。ギリシャの学者ゼノン¹は、人間の理性にもとづく主観的な理論の展開によって事物の性質を説明しようとした主観的弁証法家であったのに対し、ヘラクレイトスは、事物の性質そのものにもとづいて客観的に理論を展開した客観的弁証法家とみられていた。彼はあらゆる実在は矛盾を本質とするとみた。これに対し矛盾は主観のなかにあって、客観的な普遍的法則ではないと主張したのはソフィストである。ソクラテスはソフィストに反対して真理の絶対性を主張し、帰納法を用いた問答によって真理を明らかにしようとした。弟子のアリストテレスは弁証法は学問のための方法論の一つである、学問の真の研究方法は帰納法と演繹法であると見た。

帰納法 (Induction) とは特殊から出発して普遍的法則を導き出す学問的方法であり、ソクラテスに始まるといわれているが、これを完全なものにしたのは、近世自然科学の祖であるフランシス・ベーコンであり、また経済学では同じ英国人のジョン・スチュアート・ミルである。また演繹法 (Deduction) とは一般法則から特殊をみる学問的方法であり、一般法則を基にして特殊を考える方法である。

このように弁証法はギリシャにおいて発達したが、それはまだ学問の方法論、真理探究の方法論として考えられていたにすぎなかった。ところがプラトン、アリストテレスに次いでギリシャに生まれたプロティノスは、弁証法を事物そのものの発展のプロセスであるという見解を観念論的に展開した。彼によるとこの世は、すべて善悪の区別を超越する「超善」(神)から流出し、またそれに帰するものであり、この絶対的な「超善」から相対的なもの(善悪、主観・客観など)が流出する、そうして一から多を生じ、多は一に回帰する、自然には観念の世界のよ

うな統一はないが、そこには一はそのまま多であり、多はそのまま一であるという調和が保たれている、人間は生涯、相対界にあるが、ついには絶対者と合一し、神の栄えのなかに回帰することができる、と説いた。このような見解をプロテウスは展開したのである。彼のこのような世界観は、近世の文芸復興に影響を与えた。

カント哲学は、「物自体」のもつ仮象が、靈魂・宇宙・神の統一的把握を妨げるのを防ぐ役目を、彼の先験的弁証法の見解に与え、フィヒテやシエリングにあっては、主観・客観の合一を精神的に解明するものとして先験的弁証法が考えられていた。

弁証法が哲学の中心に据えられるようになったのはヘーゲルによってである。すなわちヘーゲルは、世界は絶対者であるロゴス（絶対理性）の弁証法的発展であり、哲学はこの世界の弁証法的発展を考察するものであるとした。

ヘーゲル哲学は世界の理論化であった。彼によれば絶対理性はまず自然に、次で精神に発展する。したがって彼の哲学は、絶対理性の理論性を示す「論理学」と「自然哲学」と「精神哲学」の三部門からなっている、とした。

「論理学」はさらに存在論・本体論・概念論の三部に分かれ、概念論はさらに弁証法的に三段階に発展する。

彼は自然は機械性、化学性、有機性の三段階に、また有機性は地球有機体、植物、動物の三段階に発展する、とみた。そしてヘーゲルによれば精神は主観（個人）的、客観（社会）的、絶対（神）的三段階に発展する。個人は本能的衝動に服する状態から発展して、自己の自由とともに他人の自由を認め、客観的精神である一般意志に従うようになる。一般意志は法・道德・人倫（団体道德）に発展し、人倫は家族・社会（市民社会）国家に発展する。そして国家の制度は立憲君主制が最高の発展段階であるとヘーゲルはみたのである。

ヘーゲルの絶対精神は主観的精神と客観的精神の総合であって、ここにおいて主観と客観、無限者と有限者の対立は止揚され、無限者は有限者の本質をなすものと認識される。

ヘーゲルは世界の発展、哲学の発展を弁証法的に説明し、ギリシヤの哲学者やソフィストによって弁論術として用いられた弁証法を世界のあらゆる事物やあらゆる概念の相互の関連や発展、人間の行為、社会の運動、歴史の発展の法則として確立した。

ところで、弁論術の場合、弁証法は正・反・合の関係として示される。「正」も「反」もともに一面的な正しさを含んでいる。それを止揚して総合したものが「合」である。ヘーゲル以前の弁証法は相手の議論を打破する技術であったが、ヘーゲルは正・反・合という形式的論理を、直接事物のもつ矛盾と、この矛盾を止揚する性質として把握し、即自態（an sich）、対自態（für sich）、即自・対自態（an und für sich）としてとらえた。これは論理的に言えば肯定・否定・総合にあたるが、内容を考えない空論としてではなく、事物の内容にそなわった弁証法とみたのである。例えばこれを人間の精神についていうならば、即自態は直観、対自態は反省、即自対自態は自覚にあたるのである。

即自・対自態は、即自態と対自態を総合した独立性をもつものである。しかしそれは程度の問題であり、より高い段階からみるなら、「それ自体としての存在」である。だからヘーゲルはこの即自対・自態の段階からさらにまた弁証法的発展が始まることを認めている。

ヘーゲル哲学は、その論理の精緻なこと、体系の壮大なことなどによって、哲学の完成とまで自覚されたが、しかしその死後（1831年）、弟子たちやその影響をうけた人々は左派、中間派、右派に分裂した。フォイエルバッハ、マルクスは、はじめ左派に属していたがやがてヘーゲルを批判した。

フォイエルバッハは、ヘーゲル哲学は観念的であり、それは一旦は宗教的立場を否定しながら、実は全体として宗教を復活させたと批判した。

またマルクスは、ヘーゲルの弁証法は頭の中の働きに過ぎず、観念的であると批判し、唯物論の立場で弁証法を理解した。この点からマルクスの弁証法は「唯物弁証法」といわれているのであるが、しかしマルクスの「物」という言葉は、単に自然的物質を指すだけでなく、社会を含んでいるのであって、弁証法を社会に適用したのが唯物史観である。そしてこれから考察するように、マルクスの物質概念を前提とする自然弁証法を、人間中心の弁証法として深化・発展させたのが、チュチュ思想の弁証法であり、唯物史観を人間中心に深化・発展させたのが、チュチュ史観である。

2. 新しい時代と新しい哲学

人類の発展、社会の発展につれて、人間の自主的思想も創造的知識も発展する。新しい時代には、新しい思想意識、新しい哲学を必要とする。

マルクス・レーニン主義も、時代の要請のなかから生まれた思想であり、それは今日でも大きな意義と役割を果たしつつある。しかしマルクスやレーニンの時代と現代は明らかにその発展段階を異にしており、したがってマルクス・レーニン主義も時代とともに発展しなければならぬ。

今日ある人たちは、マルクス・レーニン主義はもう時代遅れの思想であり、それに依拠している社会主義諸国は資本主義諸国にくらべて、政治的にも経済的にも劣位に立っている、としてマルクス・レーニン主義を否定的である。

日本でもこのようなマルクス・レーニン主義と社会主義批判がしばしば行なわれている。

またチュチュ（主体）思想については、日本ではまだ多くの人に知られておらず、またチュチュ思想について言及する人がいても、そのなかの一部の人たちは、チュチュ思想を正しく理解することなく、マルクス・レーニン主義は正しいが、チュチュ思想は誤りである、として批判的である。

この批判はチュチュ思想が人間中心の哲学であるということの内容を正しく理解せず、マル

クス・レーニン主義とは無縁の思想であるとか、一種の観念論である、と批判している。しかしチュチェ思想はマルクス・レーニン主義を継承・発展させた独創的な、新しい革命的な世界観なのである。

金日成主席は次のように述べている。

「チュチェ思想はマルクス・レーニン主義の根本原理に全く合致するものであり、国際共産主義運動の新しい発展段階とその必然的な要求を反映して生まれたものであります」〔朝鮮労働党第5回大会でおこなった中央委員会の活動報告〕1970年12月2日

金正日書記は論文「マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高くかかげて進もう」(1983年5月3日)をマルクス誕生165周年および没後100周年にさいして発表した。この論文で書記は次のように述べている。

「チュチェ思想には、マルクス・レーニン主義の旗のもとに革命闘争を展開する過程で発展し豊かになり、新たに示された思想と理論が集大成されており、現代の革命と建設が提起する新たな問題にたいする科学的な解答が与えられている」

「金日成同志によって明らかにされた主体的な立場と原則は、共産主義運動の原理とマルクス・レーニン主義の原則に合致する」

以上の引用で、金日成主席と金正日書記が明確に指摘しているように、チュチェ思想はマルクス・レーニン主義の根本原則を継承し、それを新たな時代の要請に応じて科学的に発展させた思想である。

ではチュチェ思想がマルクス主義から継承したものは何であり、それをどのように独創的に発展させたものであろうか。

すべての新しい思想はそれ以前のすぐれた思想的成果を継承し発展させている。だから新しい思想とは、それ以前の思想と共通性をもつと同時に、それを独創的に発展させた思想である。

チュチェ思想がマルクス主義から継承したものはいろいろあるが、そのうちでとくに重要なものは次の二点である。

まずその第一は、二つの思想がともに労働者階級思想であり、ともに共産主義社会を目指しているということである。マルクス主義とチュチェ思想は、いずれもその階級的立場と目標を同じくしており、決して対立する関係にはないのである。

チュチェ思想がマルクス主義から継承した第二の点は、物質世界に対する見解が同じだということである。

マルクス主義は弁証法的唯物論を基礎としている。同様にチュチェ思想も、観念論と形而上学を否定し、唯物論と弁証法を継承している。

ではチュチェ思想の独創性は何であらうか。私は以下の諸点をまず指摘したい。

(1) チュチェ思想は、人間の本質的特性を自主性と創造性と意識性である、として人間の本質にたいする全面的な、完璧な規定を与え、物質世界の特出した存在である人間の本質を哲

学史上はじめて解明したこと。

(2) 人間と世界の関係を解明することを哲学の根本問題として提起し、「人間はあらゆるものの主人であり、すべてを決定する」という哲学的原理を確立して、人間と世界の関係についての正しい認識を確立したこと。

(3) 社会とは人間と社会的富が社会的関係によって結合された人間の集団であり、社会は個々の人間よりもはるかに大きな優れた自主性と創造性と意識性をその本質としており、社会が個々の人間の自主性、創造性、意識性を付与する母体であること、および社会はその本質的属性にもとづいて自然改造、社会改造、人間改造という三大運動を展開して発展してきたことを明らかにしたこと。

(4) 人民大衆は社会・歴史の主体であり、人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史であり、社会的・歴史的運動は人民大衆の創造的運動であり、革命闘争において決定的役割を果たすのは人民大衆の自主的な思想意識であることを明らかにして、チュチェ史観を確立したこと。

(5) 革命についての新たな解釈を示し、人民政権のもとでの三大革命を基本的戦略課題として確立したこと。

(6) 領袖・党・大衆の統一体としての社会的政治的生命体は、社会の自主的主体であり、人間の真の生命は、その肉体的生命ではなく、社会的政治的生命であることを明らかにしたこと。

(7) 世界に対する見解、立場、方法の全体系としてのチュチェ思想にもとづいて、世界改造の方法、革命と建設を成功裏に行なうための方法を、党の指導原則、指道体系、活動方法、活動作風にわたり、指導芸術の域にまで高めたこと。

このうちの(4)チュチェ史観の確立とマルクスの唯物史観の関係については、とくに次の点を指摘しなければならない。すなわちマルクスの唯物史観の果たした偉大な役割について正しく評価し、そのうえでチュチェ史観を正しく理解しなければならないということである。

マルクスは「人類の歴史は階級闘争の歴史である」と述べていたが、しかし階級闘争を人類が、いつの時代でも明確な目標をもって行なったということはできない。

原始共同社会以降から資本主義社会にいたるまでの歴史の発展は、人民大衆の自主性をめざす創造的運動の歴史ではあったが、しかしマルクス主義が創始される以前の人民大衆の闘争は、ただ当面の支配者、抑圧者からの解放を決める闘争であり、目的意識的な新社会建設のための闘争ではなかった。

しかし社会発展の法則が解明され、資本主義社会の研究によって社会主義・共産主義社会の必然性が明らかにされた結果、人類は目的意識的に理想社会を目指して闘争することが可能になった。

まさにマルクス主義の創始によって労働者階級は、歴史上はじめて科学的世界観にもとづい

て新社会の建設をめざして階級闘争を展開することができるようになったのであり、マルクス主義の創始によって人類の社会改造運動はそれまでの限界をのりこえて質的転換をとげるにいたったのである。そしてこのような質的に高い段階の革命闘争をマルクス自身がその生涯において実践したのである。

マルクスとエンゲルスは1845年から6年にかけて『ドイツ・イデオロギー』を書いた当時、労働者はほとんど例外なく彼らの歴史的役割についての自覚が欠けていることをよく知っていた。そこでマルクスは彼の認識と革命的理論を革命的実践に変える使命をもつ労働者のあいだにひろめたいと思い、そのための活動を開始した。

1854年にイギリスのチャティストの代表者たちがマンチェスターに集まったとき、マルクスは挨拶の手紙のなかで次のように述べている。

「労働者階級は自然を征服した。いまや彼らは人間を征服しなければならない。この企てに成功するために、彼らは力ではなくて、共同の力の組織、全国的規模にわたる労働者階級の組織を必要とする」

そして1847年以来、「決戦の日にプロレタリアートが勝利できる力をもつためには、特別な党を、他のすべてから分離しそれらに対立して、自覚をもった階級政党をつくる必要がある」と主張しつづけてきた。

このようにマルクスは歴史上はじめて、労働者の組織化と党の建設によって新社会の実現をめざしたのである。

マルクスの唯物史観の理解にあたって次の点をも考慮しなければならない。

マルクスはさきの「序言」で「ある社会構成は、発展の余地ある生産諸力がすべて発展しきらないうちは、決して没落するものではない」と述べていた。しかし社会主義社会を実現した各国の現実をみると、生産力の発展が不十分な段階の諸国のなかから社会主義国が出現しており、発達した資本主義諸国はいまだに社会主義へ移行していない。このような現実に対する解答として、資本主義的發展とその矛盾を一国単位でみるのではなく、世界資本主義の矛盾の見地からみなければならないという解釈がある。すなわちロシアの革命についていえば、帝政ロシアは資本主義の発展においては不十分であったが、世界資本主義の矛盾がロシアという資本主義の鎖の最も弱い一環で爆発した、というのである。しかしマルクスのさきの叙述をそのままにうけとるなら、資本主義の後進国からではなく、生産力の高い先進国から革命が起らなければならないであろう。ではマルクスの叙述をどう理解すべきであろうか。

マルクスの規定は、人類がまだ社会發展の法則や資本主義が社会主義にとって代えられる必然性が解明されていなかった時代、したがって目的意識的に新社会を建設するという思想とそれを実現する主体としての賃金労働者階級の出現以前の段階では妥当な規定だったのである。そのような歴史の段階では、それらの社会は生産力が発展しきらないうちは没落して次の社会へ移行しなかったものであり、社会は生産力と生産関係の矛盾の激化のなかで立上った人民大衆

の闘争によって、一步進んだ次の社会に移行したのである。しかしマルクス主義の出現以後は、自覚した人民大衆が党の指導者のまわりに団結して社会革命を行うことが可能になったのである。

このことは、社会発展の原動力がいつの時代でも自主性のためにたたかう人民大衆ではあるが、しかし目的意識的に理想とする社会の建設が可能となったのは社会主義革命を労働者階級がめざし、人類の前史に終止符を打ち、人類の「本史」を迎えようとする時代になってからであることを意味する。1917年のロシアにおける十月社会主義革命は人類が理想的社会実現に向けて歩みだした最初の第一歩である。

第二次世界大戦後の朝鮮や中国をはじめとする社会主義社会の実現も同様である。

マルクスは『経済学批判』の「序言」で、歴史発展の法則を自然科学的な正確さで、生産力と生産関係の矛盾の激化によって社会革命の一時期がはじまることを明らかにし、また『共産党宣言』で人類の歴史は階級闘争の歴史であると指摘し、社会主義・共産主義の実現によって人間の真の解放が実現することを看破した。マルクスは人間の解放を究極の課題としていた。1844年に若いマルクスは「人間が人間にとって最高の存在である。したがって人間がいやしめられ、隷属させられ、見すてられ、軽蔑された存在にしておくようないっさいの諸関係をくつがえさなければならない」と『ヘーゲル法哲学批判・序説』で述べている。

しかしマルクス主義は人間中心の哲学として体系化されるまでにはいたらなかったし、彼の歴史観も同様である。

この点、チュチュ思想は人間中心の哲学として、思想、理論、方法の全一体系として確立され、チュチュ史観も同様に、社会・歴史の主体は人民大衆であり、人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史であり、社会的・歴史的運動は人民大衆の創造的運動であり、革命闘争において決定的役割を果たすのは人民大衆の自主的な思想意識であることを明らかにした。チュチュ思想は、マルクス主義によって労働者階級ははじめて、科学的世界観をもって社会発展の法則を把握し、階級的解放の実現と明るい新社会建設の前途を見通すようになったとして、マルクスの唯物史観を高く評価するとともに、それを人間中心のチュチュ史観として発展させ、深化させたのである。

私たちは、チュチュ史観によるマルクスの唯物史観の継承性を認識すると同時に、チュチュ史観の輝かしい独創性を正しく把握しなければならない。

また(5)の革命観についても次の点を指摘しておかなければならない。

マルクス主義はこれまで、革命とは支配階級を打倒して、政治権力を、一つの階級から他の階級に交代させることであるとみていた。これにたいして、チュチュの革命観は、勤労人民大衆の自主性実現のための創造的活動であるとみる。

金正日書記は次のように述べている。

「主席はチュチュ思想にもとづいて、現代の民族解放、階級解放、人間解放の理論と戦略・

戦術を深く解明しました」(「金日成主義の独創性を正しく認識するために」1973年4月15日)

民族解放, 階級解放, 人間解放は, いずれも自主性の実現をめざす革命である。

マルクス主義の革命論理は, プロレタリア革命の準備期の革命活動が提起する問題の解決を目的とし, このため資本主義を打倒して社会主義社会を樹立するための理論を主な内容としていた。マルクス主義は, 主としてヨーロッパの資本主義国の労働者階級の解放闘争の問題を主眼に置いていた。これにたいしてチュチェ思想は, 労働者階級と広範な人民大衆の自主を求める革命闘争が, 世界的規模で幅広く多様に展開される新しい歴史的時代の実践的要求を反映して出現したのである。このためチュチェ思想の革命論理は, 労働者階級の解放理論と戦略・戦術だけでなく, 現代が提起する反帝反封建民主主義革命と社会主義革命および社会主義建設など, 民族と階級と人間を解放するための広範な理論と戦略・戦術を包含している。

人類の歴史を階級闘争の歴史であるとみる見解は, ただ階級社会にのみ妥当するが, この場合も人民大衆の自主性のための闘争が階級闘争という形態をとったとみるべきなのである。

現在, 朝鮮民族の最大の念願である朝鮮の自主的平和統一も, 民族の自主性を実現するための闘争であり, 階級闘争の次元をこえた革命闘争である。

例えば, 1989年1月21日に, 南朝鮮で結成された「全国民族民主運動連合」(全民連)は, すべての民族民主勢力を結集した下からの組織造りにもとづいた民衆の組織であるが, その目的は「すべての抑圧と搾取の鎖を断ち切り, この土地を真の平和と繁栄の土地にすること」であり, すなわち自主性を実現するためである。南朝鮮の人民大衆は, 自主・民主・統一の旗を高く掲げ, 民族民主勢力を一つに結集して前進しつつある。

チュチェ思想は, 支配階級の権力の打倒も革命とみるのは勿論であるが, それだけではなく, 自然の束縛や古い思想と文化の束縛から抜け出すための闘争も革命とみ, 人民大衆の自主性を完全に実現するときまで革命は継続されなければならないとみる。

チュチェの革命観は, このようにその包括範囲においても広くかつ深く, 現時代の要請である「全世界の自主化」をめざす革命観である。

さて以上でマルクス・レーニン主義とチュチェ思想の関係について述べてきたが, しかし, このほかチュチェ思想は, 弁証法的唯物論についても, これを継承しているのは勿論であるが, さらにそれを深化・発展させているのである。

3. 弁証法の発展

マルクス主義とチュチェ思想の関係を解明することのなかで, 重要な位置を占める問題は, チュチェ思想と弁証法的唯物論の関連を明らかにすることである。このために, 以下まず唯物論と観念論についてみておこう。

唯物論と観念論の対立は, 世界の本源を物質とみるか観念とみるかの対立であり, 弁証法と

形而上学の対立は、物質世界を全般的つながりのもとで不斷に変化發展する存在とみるか、孤立した固定不変な状態で循環的運動をくりかえす存在とみるかの対立であった。

唯物論は、本来弁証法と結びつかなければならない。なぜなら、すべての物質は弁証法的に運動しているからである。したがって正しい唯物論は弁証法的唯物論である。

これに対して形而上学思考は何らかの観念論と結びついている。

もちろん、これまでの思想史上には、唯物論が形而上学と結びつき、観念論が弁証法と結びついて展開された学説もある。

カントは18世紀の初葉に、太陽系起源に関する仮説において、發展の見地に立って自然を取り扱う立場に立った。エンゲルスはこのカントの姿勢を、カントは發展を否定する形而上学的世界観にはじめて突破口をつくったと高く評価している。またヘーゲルが観念的にはあったが弁証法を明らかにしたことは周知のところである。

唯物論と観念論について、エンゲルスは次のように述べている。

「すべての哲学の、とくに近世の哲学の大きな根本問題は、思考と存在との関係の問題である」(岩波文庫『フォイエルバッハ論』28ページ)

「この問題にどう答えたかに応じて、哲学者たちは二つの大きな陣営に分裂した。自然にたいする精神の本源性を主張し、したがって結局なんらかの種類の世界創造を認めた人々は……観念論の陣営をつくった。自然を本源的と見た人々は、唯物論のさまざまな学派にぞくする」(同上30ページ)

ではなぜ観念論か唯物論かという対立が哲学の根本問題となるのであろうか。

精神が本源的であるとする観念論であろうと、このことがどうして人間の運命を切り開き、人間の幸せを実現することを使命とする哲学上の根本問題になるのであろうか。

唯物論が勝利するか、観念論が勝利するかという問題は、人間にとって極めて重要な問題だったのである。

なぜなら、もし観念論が勝利するならば、人間は神とか、絶対精神とか、その他何らかの観念に支配され、人間以外の何ものかによって自己の運命を決定されてしまうという間違った理論を強制されてしまうからである。

唯物論は物質世界から出発して物質世界が弁証法的に変化し發展していることを認める。これに対して形而上学は、弁証法と対立する世界の發展を認めない思考方法である。

形而上学に対する弁証法の勝利も、観念論に対する唯物論の勝利と同じように、チュチェ思想創始の不可欠の前提である。なぜなら形而上学は、事物の發展を認めず、したがって、人間が物質發展の最高の所産であることおよび人間と社会の發展を否定することになる見解だからである。

金正日書記は次のように述べている。

「……一部の人々は、チュチェ哲学は人間中心の哲学であるから、唯物弁証法の一般的原理と

はなんのかかわりもないかのように考えています。チュチュ哲学は、人間を物質世界から分離して孤立的に考察するのではなく、それより未発達の物質的存在との関係で考察することにより、人間の本質的特性はなんであり、人間の地位と役割はいかなるものであるかを解明しています。もっとも発達した物質的存在である人間が、それより未発達の物質的存在にたいし主人の地位をしめ、世界の発展において、もっとも高等な物質の運動である人間の運動が、下等な物質の運動にくらべ、より大きな役割を果たすというのが、唯物論と弁証法の基本的原理に合致するという事は明白です。チュチュ思想は唯物論と弁証法の原理をすてたのではなく、それを前提にして物質世界における人間の特出した地位と役割を科学的に解明することにより、唯物弁証法をもさらに完成させたということが出来ます」(「チュチュ思想教育における若干の問題について」1986年7月15日)

チュチュ思想は、このようにマルクス主義の弁証法的唯物論を継承し、それを前提として、人間の本質的特性を解明し、自然と社会と人間自身を変革改造することによってあらゆるものの主人としての地位を占め、すべてを決定するという役割を果たす人間を中心に据えて体系化された独創的な哲学的世界観なのである。

4. 弁証法の三大法則

人間は物質世界の特出した産物である。それゆえ唯物論は、人間を基本に据えた唯物論でなければならない。現代の物質世界は人間を除外して考えることができない。

人民大衆の社会的運動による社会の発展法則も、物質の変化発展の法則である弁証法の最高の発現ある。物質の弁証法は人間社会の発展法則として、より明確にその弁証法を貫徹する。

この世界はすべて物質から成り立っている。したがって物質は、この世界における最も根源的かつ普遍的な存在である。

金正日書記は次のように述べている。

「世界が意識や観念によってでなく、物質によって成り立っており、ある種の超自然的な圧力によってではなく、それ自体の法則にしたがって運動し変化発展することは、すでに唯物弁証法によって解明されています。世界が本質において物質であり、また物質によって統一されており、それ自体の法則にしたがって運動し変化発展するという事は否定できない事実であります」(「チュチュ哲学の理解で提起される若干の問題について」1974年4月2日)

すべての物質は一定の量として存在し、かつ一定の構造をもって存在している。そしてそれぞれの物質の内部構造の差異によってその性質を異にしており、この異なる性質にもとづいて異なった運動を展開し、変化発展する。

すべての物質の内的構造は対立物の統一であり、一定の空間を占めて時間の経過とともに自己運動を行なっている。

つまりあらゆる事物は対立物の統一であり、矛盾した存在である。それゆえ事物は変化発展する。対立物の統一において、対立も統一も絶対的でないために、その統一も変化し対立も変化する。古い対立物の統一が破壊され、新しい対立物の統一が生まれることにより、事物の発展がおこる。こうした点で対立物の統一の見方は、発展の法則である弁証法の基礎をなすものである。

事物は古い統一を破壊し新しい統一を創造する。これは古い物を単に全面的に否定することではなく、発展に役立つ物を継承してそれを新しい物質の構成部分とすることである。こうして事物が発展するためには絶えず自己否定、自己更新を続けなければならないのである。

形而上学的循環論を否定し、弁証法の三大法則を、観念論としてではあったが明らかにしたのはヘーゲルであった。

エンゲルスは『自然弁証法』(1873~1883)で次のように述べている。

「弁証法の諸法則はその要点においてつぎの三つの法則に帰着する。

量から質への、またその逆の転化の法則。

対立物の相互浸透の法則。

否定の否定の法則。

この三法則はすべて、ヘーゲルによって、彼の観念論的なしかたで、単なる思惟法則として、展開された」

弁証法の三つの法則は内容的に相互に関連しており、それぞれの法則は他の法則と無関係ではない。そもそも三つの法則はすべての物質が弁証法的に発展しているという一つの真理を、量質の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則として解明していることなのであるから、三つの法則が密接な関連をもっているのは発然である。

このように物質は弁証法的に変化発展しているのであるが、しかしだからといって物質はみな発展するものであるとか、すべての物質の発展は必然的であるとみることはできない。例えば過去の生命物質についてみても、これまでも地球上に発生し、そのご完全に滅亡した動植物は数限りなくあったのである。

しかし無生命物質から生命物質が生まれ、やがて人間が誕生したということは厳然たる事実である。こうしたことから物質の発展を大きな流れとして認めなければならない。

とくに人類の誕生は物質世界発展史上の画期的出来ごとである。人類は自己の運命を無限に開拓する可能性をもっている。

もちろん人間がおこり高ぶって墮落すれば、人類の発展も終末を迎えるであろう。しかし人間が発展を旨ざしてたゆまず努力するならば人類は果てしなく発展するであろう。

人間が無限に発展するということは、すなわち物質世界が無限に発展するということである。なぜなら人間は物質世界の特出した存在として物質世界の発展を代表しており、今日では世界の変化発展の主要な原動力になっているからである。この意味からしても、あらゆる事物を発

展の見地からみる弁証法的世界観は、実に人間を中心にした世界観でなければならない。

無生命物質の発展への指向性とその能力、動植物の発展への指向性とその能力は確定が困難であり、人間の創造的活動のように明確ではない。しかし無生命物質の場合にも運動の原因と原動力が、無生命物質そのものにあることを認めることができるし、また無生命物質にも、自己を保存しようとする指向性をみることができる。例えばこのことは素粒子のような基本的物質にもはっきりとみることができる。宇宙は素粒子の集合であるが、これらの素粒子は絶えず非常に短い瞬間のあいだに発生と消滅を繰り返す、他の素粒子に転化している。例えば中性子（ニュートロン）は一定の平均寿命をもって陽子と電子と反ニュートリノに転化する。

物質の運動を決定し、この運動を推進する力は物質それ自体にある。物質はその本質的属性によって運動し、この運動を自己の力によって展開する。そして物質の発展とは、何よりも質的な構成要素が運動の結果多様となり、より新しい、より高度の統一体に移行することを意味する。

自己を保存しようとする要求とそれを実現できる能力は、発展の遅れた物質にくらべて、より発展した物質の方が強力である。

無生命物質の場合は自己の存在を維持しようという性質と、それを実現する運動能力をそこに見出すことは容易ではない。しかし原子のなかにも(1)安定性、(2)同一性、(3)復元性をみることができる。安定性とは原子がひどい衝突やその他の影響を受けても、その特有の性質を保持する性質であり、同一性とは同じ種類のすべての原子（同じ電子数 Z ）は、ほぼ同一の性質を示すこと、すなわち同じ振動数の光を吸収したり放出したりして正確に同じ大きさ、形、内部運動をもつという性質であり、復元性とはもし原子が歪められ、高い圧力や、すぐ近くの原子によって電子軌道が変えられたりしても、歪みの原因が取り除かれれば、正確に元と同じ形と軌道を復元するという性質である。

無生命物質にくらべると生命物質は自己保存の要求をより強くもっている。しかし人間の創造的活動にもとづく社会発展の過程は、その主体が自主性と創造性をもった人間であるため、発展を要求するのも人間であり、発展を推進する力も人間にあることを明白に示している。自己の運命の主人として自主的に生き発展しようとする人間の要求と、自己の要求に即して世界を改造してゆく人間の創造的活動を抜きにしては、社会発展の弁証法を解明することはできない。

発展の法則としての弁証法は、まさに社会的運動の主体である人間の自主性と創造性にもとづいて展開される社会の発展法則において、はじめて物質発展の原因と原動力を明確にすることができるのである。

世界の発展における人間の主人としての地位と、世界の発展における人間の決定的役割を明らかにした人間中心のチュチェ思想によって、弁証法にたいする理解は、質的に深められたのである。私たちは弁証法についてもまた主体的に、主体の運動として把握しなければならない

い。

量質の法則

物質は量と質の統一物である。あらゆる物質は一定の量として存在し、かつ一定の質をもって存在している。ある物質の性質はその物質の量に照応している。

物質の量は質の基礎である。なぜなら物質は何よりもまず量として存在しているのであり、量的に存在せず質的にのみ存在する物質はないからである。私たちはまず物質をその量的規定性からみるのである。そして次に物質の質的規定性に注目する。そうすると物質の量的規定性が照応していることを見出す。つまり量的規定性が質的規定性を、物質の量がその質を規定することを知るのである。

他方、物質の質が量を規定する。物質の量を変化させるのは物質の質である。なぜなら物質の質が物質の運動の原因であり、その運動によって他の物質と結合したり、他の物質を遠ざけたりして量的に変化するからである。この意味で物質の量はその性質に規定されるのである。すなわち物質の量的変化と質的变化の関係には、物質の量の変化によって質が変化する側面と、物質の質の変化によって量が変化する側面があるのである。

物質は量的規定性と質的規定性をもって存在する。それゆえ、弁証法の第一の法則としてあげられるのは、物質の量と質の法則である。

物質の能動的側面を直接規定するのは量ではなく質である。物質の運動の原因と原動力は質的規定性に属する。無生命物質にくらべて生命物質の運動では、このことがさらにはっきりとみられる。生命物質の運動をおこし、推し進める原因は、生きようとする要決と能力をもつ生命体の質にある。

人間が物質に対して切実な利害関係をもつのは、物質の量ではなくまずその質である。人間は生活に有益な物質の性質を利用し、有害な性質をもつ物質を避ける。また人間はさまざまな物質を調査研究してそれらの物質の性質を知り、それらを人間の要求に即して改造する。物質を利用するために人間はその量的変化の限界を知ることおよびその性質を改造することが必要である。つまり人間に役立たせるためには、物質の量的規定性と質的規定性の面から物質をみななければならない。しかし人間が物質の量をみるのは、あくまでも量そのものでなく、量的に存在する物質の性質が人間にとって有益かどうかを知るためである。

唯物弁証法のまず第一の法則は、物質の量と物質の質の法則である。この法則がなぜ弁証法の第一にあげられるのか。それはこの法則が事物の変化発展の原因と原動力にたいする正しい観点を与えるからである。

エンゲルスは『自然弁証法』で次のように述べている。

「この法則を、われわれは、われわれの目的のために、次のように表現することができる。すなわち、自然のなかでは、各個それぞれの場合に精密に確定している仕方で、質的变化が起

こりうるのは、ただ物質または運動（いわゆるエネルギー）の量的な増減があるからである、と。

自然におけるすべての質的区別は、相異なる化学的組成に基づくか、運動の相異なるしは形態に基づくか、あるいは、ほとんどいつでもそうであるが、これら二つのことに共に基づくからである。それゆえ、物質あるいは運動のプラスないしマイナスなしには、つまりその当の物体の量的変化なしには、その物体の質を変えることは不可能である」

エンゲルスはまた『反デュリング論』（1877年）で、量的変化がある点に達すると突然に質的变化を起こす最もよく知られた実例の一つとして、水の固体、液体、気体、の三状態への変化の例として「水は、標準の気圧のもとでは、摂氏百度で液体状態から気体状態に移行する。したがってこの場合、この二つの転換点で、温度のたんなる量的変化が、水の質的に変化した状態を惹き起すのである」と説明している。

量質の法則は原子の世界でもみることができる。原子はプラスに帯電した小さな重い核とそれを囲むマイナスに帯電した電子から成り立っている。原子核の大きさは極めて小さく、その直径は原子の種類によって違いますが、 10cm^{-13} と 10cm^{-12} の間で、原子の約一万分の一ほどである。原子は全体としては帯電していないので、マイナスに帯電した電子はプラスに帯電した核と電荷がつり合っていないなければならない。それゆえ電子の電荷を電荷の単位とすれば、電子の数は核の電荷の数に常に等しくなければならない。その数は各種の原子に固有のものである。たとえば水素は1個の電子と、核に1単位のプラスの電荷をもっており、ヘリウムは2個の電子、リチウムは3個の電子というように、92個の電子と92個の電荷単位に帯電している核を持つウランまで続いている。この数は原子数と呼ばれ、すべての元素はそれぞれ固有の原子数 Z をもって、その数が核のプラスの電荷の数であり、また原子内の電子の数である。

この発見によって、92の元素の間の性質の差が量的な差によって説明されるようになった。たとえば35個の電子をもった臭素が、かっ色の液体で、多数の特有な化合物をつくるのに、36個の電子をもつクリプトンは気体で、全く化合物を作らず、また37個の電子を持ったルビジウムは金属であるというように、たった1個の電子が多かったり、少なかったりするだけで原子の性質に大きな差を生ずるのである。このように物質の量的変化と質的变化の弁証法的関係が原子の世界にもはっきりとみることができるのである。

およそすべての物質の量的変化はその質的变化を伴い、質的变化は量的変化を伴う。全く量的に変化しないのに質的に変化する物質はなく、質的に変化しないで量的に変化する物質もない。

量質の法則には二つの場合がある。一つはある物質がその物質と全く同一の質の物質のまま量的に変化することによって質的に変化する場合であり、もう一つはある物質がその物質とは異なる質の物質と結合して量的に変化する場合である。前者の例としては、たとえば全く同一の薬でも、量をふやして飲むならば毒になり、また猛毒をもつ物質でも、少量を用いることによって薬になることなどがあげられる。

これに対し後者の例としては、僅かを飲んでも視神経をおかされて盲目になるメチルアルコール CH_3OH に CH_2 を加えて $\text{C}_2\text{H}_5\text{OH}$ にすると、質的に異なった、私たちの飲用する酒になるなどがあげられる。

また個人と集団の力についてみても、個人が集団として組織的に活動することによって、個人の算術的総和を超える力を発揮する場合は前者の例であり、ある集団に優れた（または劣った）指導者が迎え入れられて、その集団の力を質的に向上させる（または低下させる）場合が後者の例である。

このように物質の一定の内部構造の枠内での物質の量的増加が質的發展をもたらす場合と、異なる物質との結合による内部構造の変化發展の場合がある。

この後者の場合、すなわちその物質の一定の内部構造の枠内での物質の量的増加（ということは同一の質のままでの量的増加による質的な変化）ではなく、異質なものととの結合による量的増加はとくに重要である。このような異質な物質との結合による質的变化をもたらす量的増加は、その物質の質を高める。

ある物質の単なる量的な大小が、その物質の進化發展を規定するのではなく、ある物質がどれだけ多くの異質な物質と結合、統一しているかが、その物質の進化發展を規定するのである。すなわち対立物の統一の水準が高ければ高いほど物質はより発達した存在となるのである。この点からみても人間はもっとも発達した物質的存在である。人間はもっとも多様でかつ複雑な対立的要素が結合して、もっとも複雑な有機的統一をなしている。またさらに人間社会は、個々の人間よりもさらに複雑な諸要素の統一物として、この物質世界で最も発達した存在である。今日の物質世界で最も発達した存在は原子や素粒子などではなく、人間であり社会である。

社会の發展にも量質の法則は貫徹している。社会はその生産力の發展により量的に増大する。そしてそれまでの社会的関係との矛盾を激化させるが、人民大衆はこの矛盾を克服して、より自主的な社会をつくろうとして社会的関係の変革を要求する。この場合の社会發展の原動力は生産力の担い手である人間であり勤労人民大衆である。このように社会發展の原動力が自主性と創造性と意識性をもつ人民大衆であるという意味で、自然の運動には主体がないが、社会の運動には主体があるというのである。

ところで、これまで量質の法則を社会の發展に適用するにあたって次のような理解がみられた。

古い社会から新しい社会への發展は、社会の質的变化であり、革命的な変化である。したがってそれは徐々に改良的に行なわれるのではなく、必ず激烈な階級闘争によって急激になされなければならない。しかしこのためには徐々に量的変化が前提としてなくてはならず、革命的な力を蓄積し準備する徐々に量的進行過程が前提としてあり、そのごはじめて急激な変化が生ずる、という見解である。

このような見解は、量的發展はつねに徐々に行なわれ、質的發展は急激に行なわれるという

理解を前提としており、この理解を社会の発展にもあてはめているのである。

このように理解する人たちは、量的発展の過程を経ずに革命を起すならば、それは冒険主義の誤まりであって、革命は太ず失敗する、と主張した。この理解は、漸進的な量的発展からの急激な質的变化が量質の法則であるとみたのである。

量質の法則のこのような解釈には重要な真理が認められる。しかしあらゆる量的変化がすべて徐々に行なわれ、また質的变化がすべて量的変化にくらべて急激に起こるものではない。ゆるやかな質的变化や急激な量的変化は、実はいくらかでもみられる。

量質の転化は直接的に起こる場合も媒介的に起こる場合もあることを認めず、急激な転化か、それとも徐々な転化かと形式的にみるのは弁証法的見方ではない。

核分裂の場合をみても、個々のウラニウムの核分裂は瞬間になされるが、そのつながりである連鎖反応は必ずしも瞬間に行なわれるとは限らない。原子爆弾は連鎖反応を瞬間に行なわせるのに対し、原子力発電は徐々に行なわせるのである。

物質はすべて量と質の統一物である。そして物質の運動、その変化発展の原因と原動力は物質そのもの、物質の内的構造とそれにもとづく性質にある。この物質の性質にもとづく運動を量と質の法則として理解するのが量質の法則である。

量質の法則は、あらゆる事物が一定の量をもって存在しており、かつ一定の質をもって存在していること、また事物の量的変化から質的变化が生じ、質的变化からさらに量的変化が生ずることに着目して、事物の発展法則を明らかにしているのである。それゆえ物質がまず量として存在している点に着目し、量と質の関係を明らかにした量質の法則は、弁証法の三つの法則の第一に位置づけられる。

対立物の闘争と統一の法則

物質の構造は対立物の統一である。どのような物質も、何らかの点で、相異、対立を含んだ統一物でないものはない。

ある統一物が進化発展する過程は、その事物の発展を妨げる否定的側面・要素を取り除いて、発展に有益な肯定的側面を増大させる過程であり、つまり対立物の闘争過程である。事物の発展とは、肯定的側面と否定的側面を代表する対立物の闘争を通して、新たな高い段階の対立物の統一へと移行することである。

もっとも高度に発達した物質である社会の変革、すなわち革命も、統一をめざす闘争で始まる。この闘争はより高度の、より強固な統一と団結を実現するための闘争であって、闘争自体が目的ではない。したがってこの法則を「対立物の統一と闘争の法則」というよりも「対立物の闘争と統一の法則」と規定する方が、この法則の本質をよりよく示す。物質発展の一般的過程は、ある事物に統一されている対立物の矛盾が激化し、対立物の闘争が起こり、この闘争を通じて新たな対立物の統一が実現される過程だからである。

エンゲルスはこの法則を「対立物の浸透の法則」と述べていたが、対立物の相互の作用力に主動と受動の差異があまり認められない発展水準の低い物質の運動をみる場合には、「浸透」という表現でもよいであろう。しかし、社会的運動のような人民大衆が主体となって展開する運動の場合には「浸透」という表現は妥当しない。

物質の発展水準が低ければ低いほど、主動的な運動能力は弱い。それゆえ低級な物質の運動であればあるほど、発展の原因とそれを推し進める能力の作用は不明瞭である。低級な物質間の運動においては能動と受動の関係はみることができず、ただ物質の相互作用がみられるだけである。

しかし生命物質になると主動と受動の関係がみられるようになる。生命有機体は、まわりの物質を自己の有機体の構成要素に同化させて生存と発展をはかろうとする能力をもっている。だが最も発達した生命物質である動物の能動的運動をみても、それはあくまでも本能的なものである。

対立物の闘争と統一の法則は、社会発展の原動力である人間の自主的、創造的活動においてもっとも明確にあらわれる。それゆえ「対立物の闘争と統一の法則」は、社会改造運動において理論的、実践的にきわめて大きな意義をもっている。

対立物の闘争と統一の法則の理解にあたって「矛盾」が重要視されている。しかしこの法則を正しく理解するうえで最も重要なことは、発展の原因と原動力が矛盾そのものにあるのではなく、発展の物質的担当者の性質と運動能力にあることを明らかにすることである。

もともと矛盾そのものは物質ではない。矛盾という物質はどこにも存在しない。物質の存在に矛盾した関係があるのであって、矛盾とは物質と物質との関係である。すなわち、相互に対立しながら統一している物質が、その物質のより高い統一つまりその物質の発展のために妨げとなるので克服しなければならないという側面と、克服しようとする側面、つまり対立物の矛盾した関係があるのである。

そもそも「対立物の統一」という概念は、論理的には成立し得ない。それゆえ対立物の統一を矛盾した関係にあるというのである。

一般に対立物とは、互いに対立し、排除し合う関係にある事物をいう。しかし、対立と排除（敵対関係）は同じことではない。対立物だからといって必ずしも排除し合うだけでなく結合する場合もある。男と女という相異なる性格をもつ対立物が、夫婦として統一するのはその一例である。

すべての対立物が矛盾関係にあるのではなく、対立物がその結合と統一を妨げる場合にのみ矛盾した関係となるのである。それゆえ対立物の増大がそのまま矛盾の増大を意味するのではない。対立物が増大しながら、それらが統一するとき、それは発展を意味するのである。矛盾とは物質ではなく、物質相互の矛盾した関係である。矛盾が発展の原因ではなく、発展の原因、原動力は矛盾した関係にある物質そのものである。

たとえば階級社会では、労働者階級と搾取階級のあいだに矛盾が生ずるが、この矛盾を克服して社会を変革する主体は、新しい社会を建設することに切実な利害関係をもつ労働者階級である。

では矛盾そのものは事物の発展においてどのような役割を果たすのか。矛盾を克服しなければ発展がありえないのであるから、矛盾は発展の前提条件なのである。

人間と自然の関係をみても、それは矛盾の関係にある。自然は人間の要求とは関係なく、それ自体の法則に従って運動している。このため自然には人間の要求に合うものもあれば、合わないものもある。ここに人間と自然の矛盾が生ずる。そこで人間の要求に背を向ける自然を人間の要求に役立つように改造するための人間の積極的な闘争が必要となる。それゆえ人間と自然との間に矛盾があるから闘争が起こるとみるのは誤りである。もし人間と自然の間の矛盾自体が自然改造運動の原因であるならば、人間が自然に能動的に働きかけようとしなくとも、自然改造運動が起こることになる。したがって運動の主体としての人間の役割を無視して矛盾と対立を絶対視するのは根本的誤りである。

発展とは事物の構成要素が単純化されて対立する面が縮小する過程ではなく、反対により多くの対立する要素が結合して互いに補いあいながら、それらの統一が強化される過程である。

たとえば革命党の場合でも、党内に矛盾があつてこそ、それを克服する闘争がおこり、したがって党が発展するのだとして、党内矛盾を激化させるのは誤りである。党内に矛盾がなく、統一が強化されればされるほど、その党は強力な党となることができるのである。

発展そのものが矛盾によってなされるのではなく、矛盾を解決することによって事物は発展するのである。そして矛盾克服の原因と原動力は物質（その最高の存在が人間）そのものに内在しているのである。

対立物の闘争と統一の法則は、社会が発展を続けるためには、社会の存続と発展を妨げる対立物を排除するとともに、社会の存続と発展に役立つ対立物との統一を拡大、強化しなければならず、つねに排除し分離するための闘争と、結合し統一するための闘争を正しく結びつけなければならない。社会は社会発展の原動力である人民大衆の矛盾を克服するための主体的運動によってのみ発展するのである。

社会を発展させるためには、大きく分けて三つの矛盾を解決しなければならない。一つは社会と自然との間の矛盾の解決である。社会は自然を社会の要訣に即して改造し、社会の存立と発展を保障する。それゆえ自然を改造する人間の創造的活動は、社会を発展させるための人間活動の基本的形態の一つである。

社会の発展のために解決しなければならないもう一つの矛盾は、社会の内部にある新しいものと古いものとの矛盾の解決である。社会が発展するためには社会を不断に更新しなければならない。

第三に社会を発展させるには人間自身を改造しなければならない。すなわち人間のもつ古い、

誤った思想意識を克服し、自主的な思想意識を身につけ、人間の創造力を高めてより有力な存在へと発展させなければならない。

このように社会の発展のためには、自然を改造して人間の生活手段と生産手段を生産し、またよりよい社会的富を生産し、社会の内部にある古いものを棄て去って新しいものを発展させ、よりよい社会的関係を実現し、さらに人間自身を改造して自主性と創造性と意識性を高めなくてはならない。

自然と社会と人間を改造する人民大衆の創造的な闘争は、闘争と統一を正しく結合して行なうべきである。闘争のみに片寄って統一をおろそかにすれば極左的な偏向をおかし、反対に闘争をおろそかにして統一のみに偏すれば右傾的な偏向をおかすことになる。

社会内部の対立物の矛盾は敵対的の矛盾として解決しなければならない場合もあれば、和解的の矛盾として解決しなければならない場合もある。たとえば教育や説得および相互協力によって解決すべき和解的の矛盾もあれば、処罰とか武力闘争によって解決すべき矛盾もある。矛盾の解決を常に協調的にのみ考えたり、逆に敵対的にのみ考えるのは一面的であり、誤りである。

社会的諸矛盾解決の主体は人民大衆である。チュチェ思想が社会発展の原因と原動力を主体である人民大衆であるとするのは、発展の主体である物質を中心にして考察した対立物の闘争と統一の弁証法にまったく合致する見解である。

自然改造・社会改造・人間改造という創造的運動の主体は人間であり人民大衆である。

人間社会の統一と団結の発展水準は、人びとの自主性、創造性、意識性の発展水準に照応する。

金正日書記は次のように述べている。

「もし、社会的集団の統一をはかるからといって人間の自主性と創意性をおさえるならば、集団内の真の統一ははかれず、逆に人間の自主性と創意性を保障するからといって集団の統一を破壊するならば、個人の生命の母体である社会的集団の生命が弱体化され、個人の自主性と創意性そのものを保障することができなくなります。

社会的集団の統一は、人間の自主性と創意性を高く発揮させることに寄与できるようにはかれるべきであり、人間の自主性と創意性は、あくまでも集団の統一をはかる枠内で実現されるべきです」(「チュチェ思想教育における若干の問題について」1986年7月15日)

つまり、社会という最も複雑な対立物の統一体を構成する個々人の自主性と創意性は、それが社会の統一に寄与しなければならず、社会の統一は個々人の自主性と創意性を高く発揮させるものでなくてはならないのである。

やでてそれぞれの特性をもつ地球上のすべての民族が、それぞれ自主的に生き、その特性と固有の文化の花を咲かせながら、一つの人類へと統一し団結するならば、人間相互の愛と人びとの生活のよろこびはより深まり、人類はこの宇宙でさらに有力な存在となるであろう。地球上のすべての人が統一と団結することは人類が真の愛で結ばれることを意味するものであり、

愛と信頼による全人類の統一は、統一の最高形態であり、このような統一、団結を実現した社会こそ、人類の理想とする共産主義社会であり、全社会の自主化が実現された社会である。

否定の否定の法則

否定の否定の法則は、物質の古い統一が否定されてより発展した結合体として再統一される法則である。すなわち発展に支障をきたす古い物を否定し、発展に役立つ物は保存して、それを新しい物質の一構成部分とする法則である。

否定の否定の法則は、事物が発展するためには必ず自己を否定する段階を経なければならず、自己否定の段階をのりこえて再び自己を肯定する段階に到達しなければならないという自己更新、自己発展の過程を表わす法則である。

この法則もまた、発展の物質的担当者を中心にしてのみ正しく理解できる。物質の性質と運動能力を離れて、単に発展の形態としてのみこの法則を理解してはならない。

否定の否定の法則を論証するために使われた古典的な一例は、麦粒の例である。すなわち麦粒が地に落ちて自己を否定して茎となり、茎を否定して穂となり、多くの麦粒となるという例である。この場合、否定の否定が何度おこるか問題ではない。問題は何度否定するかということにあるのではなく、自己を否定する段階を経ずには自己をより高い段階へと更新できないということにある。一粒の麦はそのまま一穂の麦に変わることはできないのである。

発展のための自己否定は、決して自己を完全に否定することではない。完全な自己否定は自己の破滅を意味する。発展のための自己否定は発展に妨げとなる古いものの否定である。それゆえこのような否定を単純な否定と区別して弁証法的否定というのである。弁証法的否定は、事物の発展における自己更新の過程である。

弁証法の他の法則と同じく、この法則も社会発展の過程で最も明白に表われる。

資本主義社会から社会主義社会へ発展するためには、資本主義社会を否定しなければならない。もちろん資本主義社会を否定するのは、社会そのものをたくすためではなく、資本主義の長所は継承し、短所は否定し、より高度の社会を建設するためである。たとえば高度な生産力、技術などは継承し、利潤追決のための商品生産などはこれを否定するのである。

資本主義社会から社会主義社会への革命的移行の過程は、一方では旧社会の統一の否定であると同時に、他方では新しい体制のもとでの再統一の過程である。

否定の否定の法則は事物発展の歴史的過程を明らかにするという点で、他の法則により包括的性格をもっている。

三つの法則の関連

物質は客観的に存在していると同時に、それ自体は主体的存在である。物質の運動をみる場合にはその主体的属性を基本にしてみなければならない。物質の発展とは物質の主体的属性が

発展することである。そして発達した物質であればあるほどその主体性格はより明確になる。物質の主体的性格を基本として物質の発展を考察してこそ、物質発展の真の姿をとらえ、弁証法の真髓を理解することができる。

弁証法の三大法則は事物が惹起する具体的発展に内在している法則を三つの基本法則としてとらえたものである。つまり事物発展の過程は一つなのであるが、これを三つの弁証法的法則として把握するのである。したがってこの三つの法則(時には三つ以上の法則として示されている)は、事物が弁証法的に発展するという法則を三つの法則として解明したものなのである。それゆえ事物の発展を三大法則において理解するとしても、このことは三大法則がそれぞれ他と無関係に独立して存在していることを意味せず、三大法則は密接に関連して統一的に存在しているのである。

物質はすべて一定の量と質の統一であるから、物質の発展とは物質の量と質の変化発展に他ならない。量質の法則が弁証法の第一にあげられる根拠はここにある。この法則は物質の主体的属性から物質の変化発展を説明する第一の法則である。

しかし物質の量と質の関係を明らかにするだけでは、物質の変化発展の原因と原動力の解明としては不十分である。この法則だけでは、新しい力と古い力がどのように対立し、どのように発展するかについての直接的解明とはならないからである。

これに対して、対立物の闘争と統一の法則は、発展を志向する新しいものが、古いものを否定する内容を明らかにする。

さらに事物発展の法則を全面的、歴史的に考察するには、否定の否定の法則の見地に立たなければならぬ。なぜなら事物の発展は時間の経過のなかで歴史的にかつ全面的に進行しているからである。この点から否定の否定の法則は、弁証法の三つの基本法則のなかで最も包括的な法則として最後の位置を占めているのである。

すべての物質のなかで、最も高い水準の発展能力をもつのは人間の集団である社会である。だから弁証法的発展は、社会の発展過程で最も明瞭にみることができる。それゆえ社会の発展は弁証法によってのみ正しく把握できるのである。

単純な物質では不明確にしか現われない事物の変化発展の原因と原動力も、社会の発展においては明瞭にみることができる。なぜなら、社会の発展においてはその原因と原動力が人民大衆にあることは明白だからである。

人間は世界の主人であり、自己の運命の主人として、自主的に生き発展しようとする。そして客観世界を改造し、自己の運命を開拓できる創造的能力をもっている。それゆえ人間の属性としての自主性と創造性をはなれては、社会発展の本質を理解することはできない。弁証法はあくまでも運動の担当者としての物質自体の主体的属性の作用の法則である。

弁証法の三つの法則の関係を社会の発展を例として考えてみよう。社会の生産力が向上し、社会の富が増え、人口が増加するにつれて、それまで社会を構成していた社会的関係が、次第

に不合理なものとなる。こうしてそれまでの社会的関係が生産力発展の桎梏となり、社会発展の妨げとなるならば、それまでの社会制度を変革して新社会を建設しなければ、社会はさらに発展することはできない。すなわち量質の法則は、同時に対立物の闘争と統一の法則を内包している。そして旧い社会制度を新しい社会制度に変える闘争は弁証法的否定であり、新しいものと旧いものとの闘争を通じて旧いものが克服され、新しいものを内容とする新しい統一が実現される過程でもある。このように社会の発展は結局、弁証法の三つの法則が同時に貫徹している過程である。

これまでの弁証法の理解のなかには、弁証法を物質運動の一定の形式、例えば「正一反一合」の図式として理解するような誤りがみられた。しかし事物発展の弁証法を、図式や形態に合わせて理解してはならない。逆に事物発展の内容から出発してその形態上の特性を理解すべきなのである。

以上で述べたように、唯物論は、物質世界の最高の存在である人間中心の唯物論として把握され深化されなくてはならず、また弁証法は、物質世界の特出した存在である人間とその社会の運動法則として把握され深化されなくてはならない。

チュチェ思想は、マルクスの弁証法的唯物論を継承し、かつそれを主体的な弁証法的唯物論として深化発展させているのである。

チュチェ思想は、唯物論を継承して、物質世界の最高の所産である人間が、世界で主人の地位を占めていることを解明し、弁証法を継承して、人間が世界を改造し、自己の運命を開拓する方途を解明しているのである。

5. おわりに

過去は無限にさかのぼることができるし、将来も無限に続くであろう。またこの宇宙空間も無限の広さをもつものであろう。かつてパスカルは「この無限の空間の永遠の沈黙が私を恐怖せしめる」と述べていたが、人間は、過去においては勿論であるが、現在もまだ自然の神秘さに心を打たれている。しかし自然の神秘さに心を打たれる存在は、この宇宙で人間だけであることも事実であろう。

人類誕生の根源には自然が存在した。無生命物質から生命物質が生まれ、生命物質の進化の結果、高等動物としておある種のサルが生まれ、やがて社会的存在として、自主性、創造性、意識性をもつ人間が生まれた。

人間はこの意味で自然の産物であり、かつ社会の産物である。

したがって人間は自然を理解し、社会を理解し、また人間自身が何であるかを理解しなければならない。そして自然の理解、社会の理解、人間自身の科学的理解を前提として、自然を変革・改造し、社会を変革・改造し、さらに人間自身を変革・改造して生き発展しなければなら

ない。こうしてこそ人間は自然の主人として、社会の主人として、また自分自身の運命の主人として生き、発展することができる。

人間が自然の主人になるということは、自然を正しく理解し、自然をより美しく、より豊かにすることであり、自然と共存・共生することである。

人間が社会の主人となるということは、社会を正しく理解し、搾取と抑圧のない豊かな、美しい社会を建設することであり、すべての人びとが自主的、創造的に生きることである。人間が自然を改造し、自然と共存共生することがなければ、人間自身が亡びることになり、人間が社会を改造し、すべての人びとが自主的、創造的に生きることなくしては、人間が人間として幸せに生きることはできない。人間の自然改造に関する知識は、現在すばらしい速度で発展しつつある。

人間の社会改造運動もまた同時に過去のいかなる時代にくらべても、今日素晴らしい段階に到達しており、今日世界は自主の時代を迎えつつある。

しかし、それにもかかわらず、現代の世界には重大な障害が存在している。それは階級社会最後の反動勢力としての帝国主義の存在である。

現情勢は、社会主義諸国と非同盟諸国、第三世界諸国、世界のすべての被抑圧民族が団結して、帝国主義に反対して闘うことを切実に求めている。

帝国主義とその植民地主義は、侵略と戦争の根源であり、新興諸国の自主的發展と社会的進歩を妨げる基本的障害である。

帝国主義の侵略的本性は絶対には変わらない。それゆえ帝国主義にたいしてはいかなる幻想もいだくことはできない。独占資本の支配する資本主義制度そのものが地上から一掃されない限り、帝国主義の侵略の本性は変ることがない。したがって現代の修正主義の克服は不可欠の課題である。

現代帝国主義は新植民地主義を実施しつつある。第二次世界大戦後、植民地体制の崩壊に直面した帝国主義は、国家的独立を認めながら新興諸国を資本主義体制の枠内にひきとめ、民族抑圧と植民地搾取を継続している。その手法は、①現地にかいらい政権を樹立し、それを通じて植民地、従属国に対する支配権を確保する。②「軍事援助」「経済援助」の供与とひきかえにかいらい軍の統帥権と経済命脈を握り、これをてことして現地の資源と労働力を収奪する。③経済的浸透とともに思想・文化的浸透を強め、現地住民の民族自主意識と革命意識を麻痺させる。④援助をてこに植民地、従属国を各種の侵略的軍事ブロックや双務的軍事同盟、あるいは軍事条約にしばりつける、などである。

現在、世界の軍事支出は尨大な額に達し、また驚ろくべき核兵力が貯蔵されている。いまから約30年前の1960年春、当時まだ上院議員であったケネディは、ニューハンプシャー大学で、世界の核貯蔵量は、高性能爆薬300億トンに相当し、それは地球上に住む人間1人あたり高性能爆薬10トンに等しいと推定される」と演説したことがあるが、現在の核兵器はすでに過剰殺

戮状態に達しており、それらはまったく人類の福祉に無縁の存在であるばかりでなく、はかり知れないマイナス的存在である。この点について宮崎勇氏は『軍縮の経済学』（岩波新書1964年）のなかで次のように指摘している。

「経済学に『収穫逓減の法則』というのがある。どんなに金をつぎこんでも、ある一点を越えともはや収益があがらなくなってしまうことをいう。かつてアメリカの原子力委員長であったゴードン・ディーン氏は、最近の軍備競争には収穫逓減の法則が働き始めた、という。

核兵器をはじめ、いろいろの兵器の貯蔵量はいまだでは、もうこれ以上追加してもなんら意味もないという“過剰殺戮”の状態に達してしまっただのである」（5ページ）

このような現実のまえでは、核兵器の高性能化を追決して膨大な軍事支出をしても、もはや東・西両陣営ともに何らの利益もない筈である。にもかかわらず、米・ソ間の軍縮交渉が一方で行われているにもかかわらず、他方では依然として核兵器のさらなる開発が行われているのである。

或る人の計算によれば、世界の一年間の軍事支出を人類の福祉に使用するなら、世界の貧困と飢餓問題を解決することができるという。軍事費なき世界の実現で、人類の平和と発展のために必要なことは論をまたないのであり、それは人類の責任でもある。

自然から生まれた人間は自然を大切に、社会から生まれた人間は社会をよりよくしなければならぬ。

現在、人類に課された責務は極めて重い。なぜなら人間だけが、この世界を、この自然と社会を改造変・革できる唯一の存在であり、人間だけが、この世界の主人としての地位と主人としての役割を占めているからである。そして哲学の真の使命は、この世界における人間地位と役割を解明することなのである。

自然科学、社会科学、人間学などのすべての科学を包括する学問としての役割を担う「哲学」の使命は、世界における人間の地位と役割の解明であるが、チュチュ思想がその哲学的な原理として解明した「人間はあらゆるものの主人であり、すべてを決定する」というテーゼは人間が自主的、創造的に生き、人間の責任を果し、幸せに生きる途を示した真理である。そして唯物弁証法は人間が自然改造、社会改造、人間改造を科学的に遂行するにあたって依拠すべき基本法則であり、今後の諸個別科学の発展につれて、唯物弁証法はさらにより深められるであろう。